

がある。しかしこれらを大量に飼育して生物的防除に用いるには、次のような困難がある。

1 アカはバクガの卵などを使つて、室内で大量に増やせるが、クロは寄主がほとんどニカメイガに限られているため、大量飼育がむずかしい。

2 アカの1♀のうむ卵の数は、30程度が限度である。従つて高い寄生率をえようとするには、余程沢山のハチを放さねばならぬので、経済的にひき合うかどうか疑わしい(クロの産卵能力はもつと高い)。

3 水田では、特殊な場合を除いて、ニカメイガ以外の鱗翅目の卵の密度は非常に低い。ニカメイガの卵のない時期に、アカが高い個体群密度を維持するに十分な寄主がないのである。クロはニカメイガ第1化期と第2化期との間は、成虫の状態で生きながらえていると考えられているが、この間の死亡率は、非常に高いに違いない。

その他、土着天敵の繁殖を阻む大きな環境抵抗、1年生作物の圃場での不安定な生物群集相などが考えられる。

## 新低毒性有機燐剤によるウンカ・ヨコバイ類を主対象とした 大面積総合防除試験

常 楽 武 男

(富山県農業試験場)

約5.2haの中晩稲集団地に於てMPP剤(バイジット)3%粉、同50%乳1000倍、同2000倍液を8月23日に散布して、ウンカ・ヨコバイ類、ニカメイチュウ・イネアオムシ、アヲヨトウ、その他についての効果・影響を、無散布、マラソン1.5粉、NAC(デナボン)1.5粉、EPN1.5粉の各区と比較した。その結果は、

1 昨年の全面積23aの試験(北陸病虫研究会報8, 1960)では、ツマグロ成虫での、散布7日後と15日後の散布前虫数に対する割合は、マラソンで57%と229%、NACは24%、160%だったのに対し、本年はマラソンは

31%と63%、NACは11%と32%で、効果の持続性は散布面積に如何に大きく支配されるかの実例となつた。

2 マラソンはツマグロの場合もヒメトビ・セジロでも、15日後には多数の若令仔虫が認められた。NACはこの若令虫の発生少く、MPPは更に少なかつた。

3 MPPの殺虫力・効果の持続性は、ツマグロの場合NACに準じ、ウンカ類ではNAC以上、又ニカメイチュウ、アオムシ、その他にもかなりの効果が認められこの試験の様な総合防除剤として適当と考えられた。但しMPP乳剤2000倍液は力不足であつた。

## ウンカ類の常発地帯を中心とする棲息経過の実態について

高 島 敬 一

(福井県立農事試験場)

昭和32年より35年にわたり、福井県丹生郡において常発地帯、準多密度地帯、少密度地帯において棲息状況を追究し、越冬実態、ウンカ・ヨコバイ類群集構成の地域性を究明した結果は次の通りである。

**早期出現状況** 苗代期(5月)ではごく稀に5月中旬にセジロウンカ成虫飛来を認めた。場所は必ずしも多密度地帯ではない。本田期では初飛来6月中旬～7月中旬で地帯間に大差はないようである。

**地帯間の棲息状況関連性** 各年次について、ウンカ・ヨコバイ類、群集構成の地帯間時期類似性を、それ等相互間の相関係数により検討したところ、早期はヒ

メトビウンカ、ツマグロヨコバイを主とする構成で各地帯とも類似し、ついで年により或種の強勢が地帯によりまたは広く現われることもあるが、強勢がなく地帯間の類似性もないこともある。ウンカ類の多発年にはその強勢が早くから現われる。

**秋冬期消去状況** 二番生えや青立稲での棲息状況は、地帯別の秋末棲息密度では大差を認めず、11～12月(トビイロウンカがやや早く)には消去する。

以上のとおり、発生相は地帯間時期間に関連性があり予察上重要である。ウンカ類の越冬場所は、棲息実態からかなり広いことが想像される。